インド哲学仏教学

丸井　浩
大学院人文社会系研究科　教授
http：//www.l.u-tokyo.ac.jp/

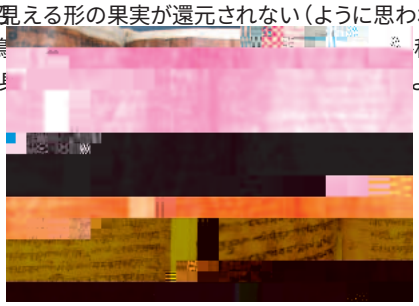
（本文へ続く）

印哲は、漢文の仏典を拠り所とする江戸時代までの伝統的な仏教研究の蓄積のもとに、18世紀後半以降めざましい発展をとげた西洋の「インド学」（サンスクリット語などのインド古典研究が中心だった）の成果が、明治時代に移植された結果、誕生した学問分野である。東京大学創立2年後(1879年)にはすでに印哲最初の講義が開かれているが、印哲の講座創設は1916年のこと（これに先立ち、梵語学講座は1901年創設）。今もなお講堂（安田講堂）に名をとどめている安田善次郎氏から巨額の寄付を受けたことによる。現在、印哲は「インド哲学仏教学研究室」という呼称であるが、教授3（インド哲学・インド・チベット仏教・日本仏教）、助教授1（インド仏教），助手1名から成る。学部生6名に対して大学院生58名(インド文学専攻の10名を含む)という逆ピラミッドの学生構成だが、これは昔から変わらない。主な理由は、学部生の多くが大学院に進学すること、外国人留学生が多いこと（13名）、そして研究・教育職に就くことがままならないことの3点。

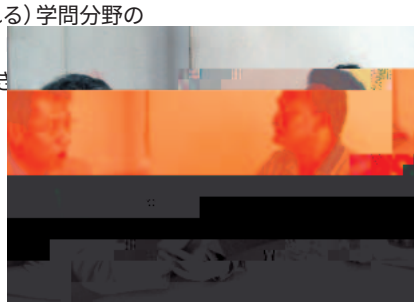
「印哲を卒業すれば僧侶の資格が取れますか？」と質問されることがある。取れない。一般に印哲という分野は、私たちの生活に浸透している仏教行事の実践や、具体的な宗派の信仰に慣れ親しむための学問ではない。むしろ仏教やインド哲学の原典をじっくり読む力を養成することに重点が置かれている。世界の諸言語の中で文法構造が最も複雑とも言われるサンスクリット語（梵語）が必修であるほか、初期仏教や南方仏教の聖典語パーリ語、大乗仏教研究に欠かせない古典チベット語、古典中国語（漢文）なども非常に重要となる。加えて、西洋のインド学仏教学の成果を消化するために、英仏独の論文・研究書を読む必要があり、また英語で論文を発表する機会も多い。

究であるが、最近は9世紀末にカシミールで活躍したジャヤンタの主著『ニヤーヤ・マンジャリー』（論理の花束）を読み進めている。宗教仏教（広くは文化伝統）をいたずらに破壊しようとする論理を「無味乾燥渣[illegible]見える形の果実が還元されない（ように思われる）学問分野の

演習「インド哲学文献研究」の授業風景



インド論理学文献の写本。古写本はやしの葉か樹皮に書かれているが、これは樹皮



インド・プーナ大学のM・デオカル先生と会話中。生ま３犇憐Ｋ択ネ… 煥遵栁い

現代型コンピューターの創始者でもあるフォン・ノイマン博士が、プリンストン大学高等研究所に若手気象学者を集めて、将来有望な計算科学分野のひとつとして「数値気象学」グループを立ち上げたのは1940年代後半である。1950年にはEniacコンピューターによって最初の大陸スケールの気象シミュレーションが行われた。